2023 年度ＧＴセミナー
第 57 回保育環境セミナー
子ども同士の関わり・異年齢編③

第３３５号　２０２３年７月３１日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ　奥山卓矢

子ども同士の関わり・異年齢編②

2023 年 7 月 10 日～12 日に「第 57 回保育環境セミナー」（子ども同士の関わり・異年齢編）を開催しました。

オフライン参加は約 150 名、オンライン参加は 60 施設を超えるお申し込みを頂きました。今回は、藤森代表から「子ども同士の関わり・異年齢」について考え方をお示し頂きました。

本誌含め、４回に分けてお送りする第３弾です。

【セミナー開催趣旨】

「見守る保育 藤森メソッド®」の提唱者　藤森平司先生は自身の実践から今の保育形態を構築しました。その実践のポイントは「子ども同士」「異年齢」「子ども主体」「チーム保育」の４つです。

「見守る保育」という言葉はいろいろなところで一人歩きしてしまい、勘違いされることがあります。

そこで提唱者である藤森先生の名前を使用することで、しっかりとした理念とエビデンス、そして４つの重要ポイントを実践することで差別化を図りました。

また実践園は根底が同じであるため、様々な実践が生まれます。
その実践を互いに学び合うことができるのも、メソッド化した
もう一つの理由です。

GT は乳幼児施設同士が繋がることを目的とした組織です。
今後より繋がりが深くなることを願っています。

ギビングツリー代表　藤森平司（新宿せいが子ども園　園長）

第 57 回保育環境セミナー　Q&A

保育環境研究所ギビングツリー代表　藤森平司氏（新宿せいが子ども園　園長）

今回、オフラインでセミナーにご参加頂いた皆様から寄せられた質問について、
ギビングツリー代表の藤森平司先生に考え方を示して頂きました。

【保育環境】

Q1.見守る保育を勉強中の園に必要なものや段階、ステップなど

まず、私が提案する保育の特徴は、「環境を通して」が、どういうことかがあります。シンガポールで見守る保育を広げている園で、最初に講演したものをどう取り上げたかというと「環境を通して」ということが新しい観点だと思ったそうです。今まで保育者が何かをすることが保育だと思っていた。それは保育園や幼稚園もそうで、ある意味、小学校のプレスクールとして始まりましたので、子どもたちに何かを教えていくとか、ある技術を習得させることをさせていました。これを言い方としては、指導すると言っていました。これはある認知的なものを小学校は伝えるので、指導という言葉を使う。これが平成元年に幼稚園教育要領が改訂され大きく変わった。それに沿って平成 2 年に指針も改訂されたが、大きくはっきり打ち出されたのは、乳幼児教育は、子どもの発達をさせるところとなった。発達は何か？赤ちゃんが寝がえりをする、ハイハイをするが、発達したときにこれをどう教えていくかというと、教えられない。例えば、寝返りは移動したい、移動したい動機がないといけない。横の方に面白そうな玩具がある、触ってみたい、取ってみたいと、そちらに移動しようとする。そうすると最初に寝返りになり、立って、歩くことに繋がってくる。私たち大人も寝返りをするが、移動の手段ではないですよね。そうすると同じ寝返るにしても、随分違うのは、赤ちゃんは向こうに行きたいための寝返りで、まず足を動かし、向こうへ行こうとして上半身を動かす。大人は、血が片方に固まらないようになので、上半身をひっくり返してから足を動かす違いがある。その発達をするためには、赤ちゃんが欲しいと思うようなものを置いていないといけない。私たちの役目は、そこに置くことです。環境を用意することで、発達を促していくことが基本です。最近の教育要領は、環境を与えてと書いてある。どんなものを環境として用意すればいいかは、赤ちゃん・子どもが自分からこういうことをしたい、やってみたいということを実現できるものを、子ども自ら触れられるようにしておくことが何を置くかが物の環境。どこに置くかが、空間的な環境。それを言葉掛けや、関わるのが人の環境。発達は環境を通して行うことが基本になりました。これが平成元年に打ち出されたので、保育者は指導という言葉から、援助という言葉に変わりました。援助は、環境を用意することです。まず基本にないといけないです。ブロックで、さあ遊びなさいでは、発達をすることにはならないです。発達をするためには、子ども自らがやりたいもの自分から出してくる。絵を描きたいと思ったら、そこに道具が置いてあるとかがゾーンの考え方で用意しておきます。子どもがやりたいものは、遺伝子的に発達にちょうどあった、効果的なもので遊ぼうとします。0歳のところに TV ゲームを置いても、それはやろうとしない。それよりもくるくるチャイムの方が楽しいとか、その子の発達に合ったものなので、子どもをよく観察して、どんな発達なのかを考えて用意すると、例えば赤ちゃんがつまむ、めくる、押す、引く発達なら、そういったものを用意する。売っているものでなければ、手作りおもちゃを作る。それを用意するのは、子どもの発達過程が今のには書かれていないが、子どもの発達が促されるものを用意する。なかなか分かりにくかったら、改定前の指針を読むと、概ね 6 つの区分で発達が書かれているので、それを見ると、どの段階が何をするかが書かれているので、そういったおもちゃを用意する。

それがないと、赤ちゃんや子どもは、他の物で変えようとします。押すものが欲しいけど、置いてなければ、椅子を押して遊びます。高いところから飛び降りる、無ければ机の上から飛び降りる。それが用意していないから他のことでしてしまう。それを保育者が怒るんですね。「なんで机に載るの！」「なんで椅子を押すの」。ではなく、押すものがないのでしょ？と。段ボールで押すものを作るとか、ただ怒って制止するのではなくて、実現できる場所と時間と物を用意することです。環境を設定していくことが基本です。それをよく見て作るといいと思います。

Q2.3.4.5 歳の異年齢児保育をしているのですが、年長が作ったものを年少が壊してしまうことがよくあり、遊びが途切れてしまうこともあります。さわらないでねと書いたり、作品棚に飾っているのですが、それも壊れてしまい、遊びの保証ができにくい環境となっています。何かアドバイスがありますでしょうか…？

うちの園は発達障害の子がいます。しかし、あまり人が作ったものを壊さないですね。壊すという相談が多いが、２歳でもあまり壊さない。ディープラーニングと言って、ロボットが開発された時にこういう実験があります。ロボットに人間が命令をして、その一つに机の上を歩きなさい、このまま歩くと落ちると判断すると、「落ちるから嫌です」という言うロボットが出ているが、作ってあるブロックを壊しなさいと命令すると、「嫌です」と。人間の命令を聞けないのかと言ったら、しゃがみ込んで泣き出していた。「一生懸命作っていたので、壊せません」と言っていた。壊すか壊さないかのポイントは、一生懸命作っている最中を見ているかどうかですね。出来上がったものを見せると壊す喜びがある。作っている最中を見ていると、真剣さからあまり壊さないですね。もう一つ、うちの園はブロックが豊富にあります。壊す必要もないですね、やりたければいくらでもあります。うちの園を開園したときに、玩具に予算を付けました。あるおもちゃ研究家にそのお金を渡して、園に色々な玩具を用意してくれと頼んだ。そしたら、ブロックだけだった。山ほど送ってきた。渡した予算全てブロックを持ってきた。出してあるのは一部で、倉庫に山ほどあります。子どもたちはいくら使っても平気ですので、壊さないこともあります。それから不思議だが、うちの子たちはあまり執着がないですね。こんな作品が出来たのにもったいないと私たちが思っても、子どもたちは、またつくるからいいよという安心感からかもしれません。年長さんに壊されたらどうするとインタビューをしたら、「わざとだったら怒るけど、間違って壊したなら今度から気を付けてね」というと言っていた。年少さんにはそういうと言っていたが、どうしてそう伝えたのかを聞いてみたら、自分が年少の時に、年長から言われてうれしかったからと言っていた。人への思いやりは、自分を思いやってくれた喜びや、嬉しさでやってあげるんだと思うんですね。まず最初は先生かもしれません。先生から何かしてもらって嬉しい気持ちいがあると、人にできるかもしれないですし、異年齢だと伝承されていくかもしれませんし、要素をいくつか出したが、一生懸命作っている姿を見せることで、それを無碍に壊したりしない。それから物が豊富にある。取り上げたり、取り合ったりしなくて済む。誤って壊したときにどういう体験をしてもらったかによる。繰り返すことで壊さない。もう一つドイツが、ガッシャーンと音を楽しむことがあるが、破壊する音を楽しみにしてはいけないとドイツではあるらしく、絨毯の上で積み上げさせます。床に壊した音が行かないように、それを最初職員に提案したら、高く積めませんと言われ、毛足の短いじゅうたんの上で積み重ねるようにしています。

Q3.4 歳児を受け持っているんですが、これからプールが始まるのですがカリキュラムがなくただ、楽しいで終わってしまう、プールなんですがどんな遊び、どんなことを身につけたらいいのですか？？また、遊びについて知りたいです。

日本は悩みがあります。ドイツへ１０年くらい続けて行って、プールで泳いでいる姿は一度も見たことはありません。自然の体験をすることで、多くは水遊びや、泥遊びが中心です。水が必ず砂場に流れ込んでそれがメインです。

たまに、プール指導はあります、これは小学校や地域のプールを借りていきます。そこで行うことは、浮くことの練習で泳ぐことは教えていません。アメリカでベビースイミングがはじめた動機だが、ドイツは池が多い。助けが来るまで浮いていることが大事なので、早く泳ぐことはいらないので、浮く練習をします。小学校などの深いプールへ行き、浮き輪を付けて浮くだけです。泳ぎをするのは日本の体育の授業位です。併せて言うと、園庭の考え方も違います。園庭は外へ行って元気に走り回るのはグラウンドです。園庭は外気に触れたり、自然に触れ合う場所です。あるところで体験したが、０１２歳の子が園庭にいました。雨が降ってきました。急いでビーチパラソル避難したのは、先生だけです。子どもたちは雨の中で平気で遊んで、口を開けて雨を飲み始めて、雨どいに落ちてくる水をバケツに入れたりしていました。なぜか。外は自然を体験する場所だったら、雨は自然なので、雨だから部屋に入りましょう。雨だから中止にしましょうは、本来おかしな話というのが、ドイツの考え方です。遠足にしても、森に行くプロジェクトでも、寒かろうが、雪でも、自然を体験することが目的なので行きます。部屋に戻ったらドライヤーで髪を乾かし、服を着替えます。日本は体を動かすことが中心ですけど、これは小学校の軍事教練のために作った発想が、いまだに残っているんですね。それはドイツはないですね。保育業者とコラボをして、新しい園庭を提案しようとしています。室内にあるゾーンをそのまま屋外でやったらどうなるか。木陰で絵本を読む絵本ゾーン。木の葉や木の実で作る造形ゾーン、ブロックゾーンとか。今回シンガポールへ行って感心したのが、マットキッチン。ままごとを泥でやっていた。泥をフライパンで、泥で料理をする場所があった。絵を描くときに、泥を水で溶かして絵を描くとか、室内でやっていることを外でやることを日本でも提案しようかと思っている。今までのように、外で走り回るのではない園庭。園庭での自然を対象に学ぶ場所の環境を考えています。プールで泳ぐことはあまりないです。日本なので、びしゃびしゃ水でやるが、だんだん難しくなってきたのは、暑くてプールが中止になりました。寒くても中止になるが、暑くても中止になるので、プールに入ることが少ないなら、水遊びをして実験をするとか、水路を作るでもいいかなと思います。

Q4.新宿せいがこども園さんの保育環境を参考に、玩具や製作道具の片付け場所を作っていますが、常に綺麗な状態を保てず、すぐに物が壊れたり、玩具をばら撒いたりという遊びに繋がってしまい悩んでいます。保育環境の維持方法や、子どもたちがどうすれば物を大切に扱ったり整理整頓しようという意識をもてるのか、声かけや援助を知りたいです。

昨日、見学へ来た方は気付いたと思うが、パズルがはまっていなかった。私が一生懸命はめて、子どもたちにも手伝ってもらったが、はめて終わらないと、なくなったピースは分からないですね。なくなったらその日に探さないと、もう見つからないですね。壊した、無くしたは、その日じゃないとだめですね。いつまでも壊れていたら、子どもも無頓着になるので、すぐに直す、補充するとか。ビー玉でもそう。10 個入れる入れ物を作って、その日のうちに１０個入れて終わらないと、後になってなくなったと言っても、どこへ行ったか分からない。その日のうちですね。
ただ、中々難しいのが、障子がびりびりになっているので、びりびりする楽しさもあるが、あまりやると、余計するので、お手伝い保育があるので、お手伝い保育の日に障子を貼る日をしたらと提案しているが、そのままにせず、修理したほうがいいと思っている。物を大切にしなさいではなくて、すぐに直したり、補充することだと思います。
声掛けしなくても、子どもは１個足りないとかいうので、家具の下の方を見てみようと言って、探したりすると、なくしたり、壊したりはしないように思います。

Q5.60 人定員で落ち着いた環境、300 人定員で賑やかな環境では、やはり色々な人と関わりあえる後者の方が必要となってくるのでしょうか？

最適規模というものがあるが何とも言えないが、今言われているのが、人数の研究については、ダンバーという人が研究をしています。生き物の脳の大きさと、集団の大きさが比例すると言われています。集団が大きくなると、脳が大きくなると言われているが、人間の脳の大きさに比例する数は、だいたい 140〜150 と言われています。そういう意味では 300 人は多いような気がしますし、うちの園は 170 数名ですが、職員と子どもを入れて私は 140 くらいで、子どもの定員は 100 名くらいでいい気がしますね。脳の大きさだけはなくて、配置基準などが議論されています。ヨーロッパはかなり少ないです。スウェーデンは一クラス 10 名とか少ないです。私が一度、大阪の難波の研修でスウェーデンの報告を聞いた。子どもは 10〜20 人くらいがいいよねと言っていたが、一緒に参加した人と、難波の街に出たら、人がうわーといた。10〜20 人だけでずっと保育していたら、この町で住んでいけるか？と思った。電車の中で本は読めないですよ。私は国の環境もあるように思います。普段がどういう環境がどうあるかと同時に、学級数という小学校は４０人学級とか４５名とか、私が小学校勤めていた時にそのくらい人数いたが、教員をやめる最後の年は 36 名だった。今は 20 名くらいが多いが、その時少ないと思った。まず楽と思ったのが、通知表の所見欄を書くときですね。大体 30 数名で疲れてくるが、それで終わってしまう。人数が少ない方が、事務量が少なくていいですが、クラス経営は今の保育と基本子ども同士の関わりから作っていたので、子ども同士にどう役割を持たせるか。誰かが何かを言い出したら、この子がこう反応するとか、上手く役割分担をするときに、45 人くらいで役割分担をしていると、36 名だと役割が足りない。少ないのは管理するならいいけど、本人たちがやるなら役不足ですね。10 人だとやりやすいが、子ども同士だと役割不足な気がして、ある人数いた方がいいと思うのが一つ。昨日話をしたが、シンガポールは見学した園の一つの園が 1000 名定員。他は 400〜500 名。向こうが言ったのは、スケールメリットがありますと言っていた。クラスは多いが、クラスごとは少なく分けて、共有部分は 1000 人だと、1000 人分のを買えるので、すごい贅沢なものを買えると言っていました。スケールメリットがあると言っていたが、考え方があるが、子ども集団の中であまり多いのは多い気がしますが、少なくてもちょっと問題な気がします。その地域性もあると思います。300 人は多い気がしますが、これまでやった中では、100 人くらいが一番やりやすい気がしました。

Q6.子どもが、自分の選択に責任をとれなかったとき(例えばお菓子を選ぶとき、欲張って多く取ってしまい食べきれない場合など)、大人は何か声をかけるべきですか？また、声をかける必要がある場合はどのような声掛けが望ましいですか？

基本的には、ほら見ろと思わないこと。今度からこうしようねと適切な選択の仕方を提案するようにして、「食べれないくせ」にとかは言わない方がいいです。それよりも、「今度からこうしようね」ということがあります。セミバイキングは、自分が食べれる量をよそるが、これを中国でやったらほとんど不可能ですね。食べれようが、食べれまいが取ってしまう。中国で保護者に講演をして模擬でやったら、食べれないけど全部よそってしまう。これは中国や韓国の文化で、残すのがいいという文化です。それは今見直しています。こんな無駄はないと止めようとしています。最初仲間と韓国へ行った。最初分からなくて、食べきらないと悪いと思った。町の中で食べていたら、次から次へとよそってくる。なんと食べきるというのは、足りない証拠らしいです。もう美味しくいただいたというのは、残すことらしくて、必死で食べていたら、またくれて、これは文化で中国もそうで、基本的に見直そうとなっています。適切に選べるようにするには、足りない時にお代わりが出来るとか、ブロックのように、取っておかないとなくなる

と思うと余分に取ってしまう。だんだん適切な選び方ができるような助言をしてあげる。足りなかったら、後でお代わりしたらとか、食べれないくせによそって、とか嫌味を言わないことです。「多かったね、今度は少なくしてみたら」など助言してあげるといいと思います。

Q7.科学ゾーンをこれから作ろうとしています。どういった感じでスタートしていけばいいのか、また、環境構成で配慮すべき点などはあるのでしょうか？生物には興味を持ちやすいし図鑑を置いておけば自分たちから調べて深掘りしていくので現在観察ゾーンのようなものを設けていますが、科学ゾーンのイメージのような物理化学方面の不思議に「どうしてだろうね？」と言っても子どもたちがスッとどこかに行ってしまうのでうまく問いかけして興味を持ってもらうのが難しいです。

すぐに行ってしまうというが、うちは逆にこんな長くいるなという印象で、さもないことに長く取り組んでいる。多分、先生が先だって面白がるからですかね。明らかに変だと思う提案でもやってみる。さっきの石鹸水で、光を反射させたら乱反射するので虹になりっこないが、やってみようよ！とか、子どもの提案をやってみると、色々突拍子もない提案をしてきます。それを真に受けてやってみることと、ほとんど失敗をするが面白がると言ったら変だが、何回も挑戦をする。途中から子どもが自分たちで発見をしてくるということです。私が好きなエピソードがいくつかあるが、卒園した子たちが園庭の下を通った時に、下から STEM 担当の彼（森口先生）に、「最近、科学ゾーン何か置いてある？」と聞いので、「特に」と言ったら、「公園に行ったら、科学の物持ってくるよ」と言っていた。科学というのが何か？ただの葉っぱかもしれないが、日常歩きながら見つける不思議さ。ある時、部屋に行ったら大きな石が置いてあった。子どもたちに何でかを聞いたら、これは科学だ。なんでかというと、石が落ちていたから拾おうとしたら、土の下にこんな大きな石になっていて、これは科学だと言って、それを持ってきて飾っているとか、ある男の子が「僕科学見つけた！」と言って、自分の手をたたき出して、「叩くと赤くなるでしょ、これ科学だよね」と言ったとかですね。そんなことからでいい。改めて科学実験をしなくても子どもたちが不思議さに気付いた時に、見つけた科学で構わない。それに慣れるための言葉かけが必要なので、ある園にいったときにこういったことがありました。クッキングでクッキーを焼いていました。「美味しくなるかね？」と先生が言葉かけをしていたが、それもいいが、「こんな小さいものが、オーブンに入れたら大きくなるのかね？」とか、不思議さを感じること。色が変わったね！とか、不思議さを問いかけに入れていくと、同じクッキー作りでも変わってくる。なんでこんな風になるのかね？とか、ゼリーでも何で固まるのかね？とかですね。不思議さの体験で一番悩ましいことが、子どもは何で？というが、答えることはあまり意味がないと言われています。答えると「フーン」で終わってしまう。そうじゃなくて、どうしてだろうね？なんでだろうね？でいいと言われています。科学で大事なのは、科学を学ぶことではなくて、不思議さ好奇心、探求心とかを身につけるためにやるわけですから、そういうことだと思います。

Q8.昨日、見学させていただきました。今年度のテーマが「STEM を楽しもう」とありましたが、実践では、具体的にどのようなことをなさっているのでしょうか!?　異年齢保育のテーマから外れてしまうかもしれませんが、STEM について学びたいと思っていたところなので、お伺いできればと思います。

今度夕涼み会をやるが、STEM がテーマなので、階ごとに S の階、T の階、E の階、M の階とあるが、それぞれクラスが分担をしているので、私は何をするか分かっていないが、先生たちも試行錯誤しながらやっています。誕生会は調理の焼く、煮るとか。調理器具の説明や黒曜石で切るとか。うちは 2 年ごとのテーマで、昨年も STEM がテーマで、去年は調理自体が科学ということで、クッキングでバターを作ってパンに塗って食べるとか、ポッポコーンを普通は蓋をするが、自由に跳ねるままにして、どれだけ跳ねるかとか、昨年 1 年間やりました。今年は T や E なので

調理器具。切るは昔はちぎるとか、私が黒曜石を持っていて、「先生の使っていいですか？」と聞かれ、包丁があるとか、鍋で煮るとどうなるかとかをやっています。遠足はウォークラリーなんですけど、高田馬場は鉄腕アトムが生まれている場所ですので、中身を知る。鉄腕アトムが生まれ場所はここだとか、ちなんだ場所を巡ることをやったりとか、不思議だが鉄腕アトム出生れたことを知らない保護者がいた。なんで鉄腕アトムの絵が駅の壁画にかいてあるかとか、駅メロが鉄腕アトムの理由を知らなかった。鉄腕アトムは、高田馬場にある科学省で生まれています。戸塚三小に入学していると原作にある。身近な中で、地域の中にもあったり、園の調理器具だけにしてもあったりとか、改めて STEM ですという言い方ではなく、子どもにも、そういうものにも興味を持つということです。夕涼み会で、迷路を段ボールで準備しているが、ここへ行くと行き止まってしまうとか、地図を持って歩かせるとプログラミングになるとか先生たちが半分楽しんでやっています。

Q9.室内遊びでは、子ども同士のトラブルが多く、声をかけなければいけない状況がどうしても増えてしまいます。子供が夢中になれる遊びがないのか…？と思い、環境設定を見直しをしてみるのですが、どうもうまくいかず保育者の声が増えてしまいます。環境設定を行う際にどのようなことを考え、どのように設定されてますか？

見学をした方は分かると思うが、壊すと同じでうちはあまりトラブルはないと思う。トラブった場合は、ピーステーブルで話をする。今はなくなったが、どこで何をして遊びたいかをゾーン表があって、行く場所に印をしていました。最初は絵本のところへ行くとか意識付ける。そこにマスがあれば、そのゾーンの定員があるので、必要以上はいかない。これはドイツでもやっていて、10 のマスがあれば、そのゾーンの定員として、トラブらないために、自分で何をしたいかを決めて記していく。他のところへ移動していく時は、印を移していくことをしていました。何年か経ってドイツで使っていなかった。ドイツの人に聞いたら、子どもに毎回面倒くさいと言われ、見ればわかると言われそれはそうだと止めましたと。うちでも今は見れば分かるので、やめています。いっぱい人がい過ぎたら他のところで遊びに行っています。最初のうちはそういう風に印をするとか、移動するときは変えるとかの工夫をしました、いろいろやってみるといいと思います。ゾーンの人気が偏るとトラブルと思いますので、流行っていれば、そこを広くしようとするなども考えるといいかもしれません。ベルギーの保育の中で見直す時に、場所はその場所でいいのかを見直す。集中しない時はその場所でいいのか？自分の世界に入るのなら、隅の方で邪魔されないようにするとか、場所を見直す。2 つ目は子どもに魅力のあるものか？ 3 つ目は、子どもの発達に合ったものは面白いが、発達を受け止める幅の広い物ほどいいおもちゃと言われています。具体的に言えば、ブロックは発達が幼い子も、発達した子も同じブロックで遊べる。それは作るもので変えられるから。フレキシブルなものほどいいおもちゃと言われています。ブロック、絵本、製作は、ずっと置いておいても使う子どもの発達によって、すごい絵が描けたりするので、そういうことをしておくと、トラブルは少ないかもしれません。

Q10.設定保育とは何ですか？

便宜上、一般的に使っているが、私は設定保育はないと思っています。朝来てから帰るまで設定保育だと思っています。先生がちゃんと設定をしています。ただしやらせることを設定するのではなくて、環境を用意すること。カリキュラムを作って、ある目的のためにする所謂、かつて言った設定保育は、うちの場合は課題保育。課題を持った保育です。子どもたちがどこで、何を、主体的遊びの時間として、設定と自由という言い方をするのはやめています。
全ての時間を先生が設定するので、設定保育はかつて使われていた言葉です。先生が指導計画を書いて、その通りにやる保育のことを設定保育。指導計画を立てないで行うのが自由保育という分け方をしていた時代がありました。
実習生が入るときの責任実習は、設定保育を責任持たせるという意味です。私はそうではなくて、ブロックゾーンの

環境を責任もってやってみてくださいでもいいと思っているが、実習ノートは、ねらいを立てて何を用意するか、どうだったかと決まったことをするが私はちょっと違うと思っている。

Q11.0.1 歳の環境で気をつける事や意識しておいた方がいいことがあれば知りたいです。

飲み込んだり、怪我したりすることを自分で防げないとしたら、当然、防いであげないといけないです。一番は飲み込んでしまう可能です。まず大きさ。飲み込めてしまう基準は、トイレットペーパーの穴の芯と言われています。芯を通して、通ってしまうと赤ちゃんの喉を通ってしまう可能性があります。測るものも売っているが、日常的なものを使うとしたら、トイレットペーパーの芯。大きさの基準でわかりやすいのは、ぐるぐるチャイムで、転がってくるボール。あれは飲み込めない大きさと言われ、それより小さいものは気を付けないといけない。それから喉をふさいでしまうもの。風船は口にくわえて割れると喉に張り付いてしまうと息が出来ないので、大きさではないが、気を付けないといけない。なので、ボールでも穴の開いたものが多いですね。ふさがっても、息ができるようにするものが赤ちゃんの物は多い。最近、りんごが言われているが、玩具に限らず、口の中に入れるものは、気を付けないといけない。それからけがをするようなものは、気を付けないといけない。ですから 01 の環境で、1 歳で大事なのが、1 歳のクラスが 2 歳のクラスになっていきます。2 歳になると微細運動と言って、手先指先を使うことが必要になってきます。紐通しやパズルなどがあります。赤ちゃんがそれを飲み込んでしまう可能性があるため、行ってはダメではなく、きちんと分けて、行けないようにする必要があります。昨日見た方は気づいたと思うが、1 歳の部屋の隅に囲まれた空間があると思います。あそこは微細運動をするための部屋で、小さい子が入れないようにしてあります。ただし、微細運動は必要なので、中でやるようにしています。あとは、赤ちゃんに選ばせれば、自分で選びます。
もう一つ、うちはおもちゃが散らばっています。赤ちゃんはそこでうつぶせになっているが、見つけたものの方へ行こうとします。しまい込んでいたら、それはありません。なので、できる限り散らばせておく。フランスでは、散らばすものを 1 日に何回か変えるそうです。日本はどうしても抵抗のある人が多いです、片づけるというのは、何もなくすことと思っている人が多いが、子どもが興味関心を持ちやすくするためには、小さいうちは散らばします。少し大きくなったら、用途を決めておく場所を決めるのがゾーンです。

本稿は、2023 年 7 月 11 日に開催した「第 57 回保育環境セミナー」の Q&A の内容をまとめたものです。
次号に続く。

（文責/奥山卓矢）